

一般社団法人 日本がん看護学会

平成 28 年度がん看護専門看護師海外研修助成事業

第 2 回がん看護専門看護師海外研修報告書

2016 年 10 月 30 日

熱方智和子、今西優子、前澤美代子、梅田恵

はじめに

平成 27 年度から日本がん看護学会主催により、公益財団法人小林がん学術振興会から「がん看護専門看護師の継続教育に関する助成-がん看護専門看護師海外研修助成事業」の助成金を得て、がん看護専門看護師海外研修助成事業が実施され、今年度で 2 回目となる。この度、私達は、この第 2 回がん看護専門看護師海外研修に、平成 28 年 9 月 10 日から 9 月 17 日の 1 週間に渡り参加した。研修では、病院見学やワークショップ、シャドーイングを行い、その後、帰国後も学びを深められるように、研修生で集まりディスカッションを重ねている。本稿では、「APN の実践と評価・CNS の役割機能、位置づけ」、及び「サバイバーの力を引き出す多職種アプローチとプログラム」のテーマに焦点をあてて報告し、更に今後の課題について考察した。

1. 研修生の背景

1) 研修目標

- ① 最新のがん医療の知見及びがん看護の現状、米国の CNS の役割や実際の活動から、OCNS の役割や責任、機能などを理解し、自己の実践に生かす。
- ② 米国におけるがんサバイバーシップの現状を知り、サバイバーシップにおける OCNS の役割について学ぶ。更に、日本の文化にあったサバイバーシッププログラムを検討する。
- ③ 米国の CNS の教育的背景と実践のつながりについて学ぶ。

2) 準備

- OCNS としての自己の実践をまとめ、学びたいこと、確認したいことを整理しておく。
- 自己の研修目標を明確にする。
- 英語の文献を読み、語彙力を増やしておく。
- 予防接種などの体調管理と調整

2. 研修の概要

日程/場所	項目	内容
9/10	サンフランシスコ 到着	夕方は自由行動
9/11 ホテル 会議室	オリエンテーション ワークショップ 1 ワークショップ 2 ワークショップ 3	アメリカの看護制度などこれからの講義前の知識 アメリカの APN の最近の動向とがん臨床試験 (Motoko Ishii. RN) 経口抗がん薬のアドヒアランス(Tim Freitas. RN) (写真 1) アメリカの保健医療制度(Motoko Ishii. RN)
9/12 ホテル 会議室	ワークショップ 4 ワークショップ 5	最新のがん治療(Michael)予定が休講 シャドーイングに備えての Medical English とコミュニケー ーション方法、UCSF 見学について準備 (Motoko Ishii. RN) ヘルスポリシーと看護教育(Sabina Gonzales.RN) (写真 2)
9/13 UCSF	UCSF 見学& 1名シャドーイング ワークショップ 6	UCSF (Mission Bay) がん治療を支えるプログラム Nutrition, Art for Recovery, Cancer Resource Center, Decision Making Services (写真 3) Infusion Center & Outpatient Integrative Medicine UCSF (Mt Zion) CNS の役割とがんサバイバーシップ (Deborah Hamolsky. RN, MS,AOCNS) (写真 4) ● CNS のコンピテンシー/モデルナースの特性 ● ケアの改善・質の改善 ● サバイバーシップ/フォローアップケア
9/14	スタンフォード大学 メディカルセンター UCSF(Mission Bay) シャドーイング	● 施設見学血液腫瘍内科の看護師長、CNS、NP から各 役割機能や看護師のラダー制度などについて説明 Symptom Management Service (写真 5) ● 緩和医療チームの外来に同席し、がん告知後の情緒的 なサポートや ACP、化学療法中の症状マネジメントな どの実際を見学
9/15	UCSF(Parnassus) クラスの見学	2名の CNS とのグループディスカッション (写真 6) ● 疼痛専門 CNS と血液腫瘍専門の CNS の役割と実践 新人看護師や中途採用看護師を対象とした血液がん、抗が ん剤治療、症状マネジメントと看護についての講義見学
9/16	サンフランシスコ 出発	9時 30分チェックアウト

3. 実際の学びとディスカッション

項目	学び（米国の実際）	ディスカッション（考察）
APNの実践と評価・CNSの役割機能、位置づけ	<ol style="list-style-type: none"> 1. CNSの役割の中で、患者への直接ケアは20%程度で、コンサルテーションや教育を中心に機能していた。実際に臨床の場で問題が発生した時に、相談を受けてプロジェクトチームに入ったり立ち上げたりしている→解決策を検討→実施→評価の可視化という問題解決のサイクルを回して役割を發揮していた。 2. 地域・社会全体を俯瞰的に見て、問題を抽出し、計画・実施・評価を可視化するヘルスポリシーを基盤として問題や課題に向き合っていた。 3. CNSやNP、CNEなどの役割がオーバーラップすることはあるが、それぞれ役割を明確にし、互いを尊重しながら協働している。 4. 米国では、がん看護領域においてONSが作成している「Oncology、Nurse」のオンライン資格を活用しており、がん関連の部署での看護師採用に影響していた。そのためかジェネラリストの看護師への教育内容も専門性が高かった。また、抗がん剤を取り扱う部門が集約化していることも、このような専門性の高さに影響しているように考えられた。具体的には、抗がん剤の取り扱いや患者指導などが確実にできるよう、ジェネラリストは疾患の専門的な学習と実践における徹底したトレーニングを受 	<p>日本の臨床現場では、CNSとジェネラリストの役割が明確でなく、CNSは管理や教育・ケアの実践など多くの役割を担っている現状がある。CNSと看護管理者、ジェネラリストが、互いの役割や機能を理解し、協働していく必要がある。APNの創造的な活動の背景には、修了時には高度実践ができることが保証される教育や組織からのニーズに対して可視化できる結果を示すなどを繰り返すことで、その役割・位置づけを確実なものにしていた。CNSが役割を發揮するためには、臨床データやEBMを基にした実践から評価までを可視化できるよう系統立てて戦略的に行うことが必要である。また、プロフェッショナルとしての意識を高く、専門家としてのプライドの高さや自身がさらに専門性を後押ししているように感じられた。成果を自己アピールすることで地位を獲得する力も必要である。更に、管理的なサポートも重要で、そのためには、CNS自身の実践評価の方法を開発しなければならない。今後、その研究には看護管理者の協力も得ることが重要と考える。</p>

項目	学び（米国の実際）	ディスカッション（考察）
	<p>けていた。</p> <p>一方 CNS は、プロジェクトを立ち上げるなどの創造的な活動をしており、このような CNS とジェネラリストの役割を明確にすることで、合理性や効率性を追求していた。</p>	
<p>サバイバーの力を引き出す多職種アプローチとプログラム</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 非医療スタッフによるサバイバーへの支援：心理士による Art for Recovery（生命の危機に直面する病をもつ患者や家族、友人、医療者へ対し、アートを通して感情表出を助けるプログラム）、がん専門栄養士による栄養相談、Cancer Resource Center（情報提供や図書の貸し出し、ピアサポートグループなどの情報提供）、Patient Support Corps（医療系の学校に進学を希望している学生達による意思決定のサポート）、エクササイズ<small>の</small>専門の資格をもつトレーナーや、鍼灸師やマッサージ師、ヨガインストラクターなど、専門家で構成されているクラスが多数ある。 2. Survivorship Program <ol style="list-style-type: none"> 1) 治療前から治療期にわたるケア 身体的影響・情緒的問題・生活上の問題をアセスメントして、禁煙・エクササイズ・栄養などの行動変容を起こせるようなケアプランを患者に提案する。 2) STAR（Survivorship Training and Rehabilitation）プログラム ®認定 科学的根拠に基づくリハビリテ 	<p>専門家の方々は、強い信念と責任をもって患者一人一人にあった支援を継続して行っており、介入の評価についてもしっかりと公表することで、医療チームからの支持を得ていた。我が国では、病院内にがん相談支援センターを設ける施設は増え、乳がん患者を対象としたヨガ教室や体を動かすためのプログラムが少しずつ始まってきているが、医療保険サービス以外の地域でのサービスの提供がない。しかし、米国では CNS がコミュニティサービスを支援したり、医療との橋渡しを行い、サバイバーシッププログラムが多数コミュニティに存在するようになっていた。</p> <p>このようなプログラムを構築していく上では、コミュニケーション能力、医療チームの調整、マネジメント能力、方略の多様性、優れた感性が必要であり、だからこそ、CNS の役割発揮は重要と考える。</p> <p>そして、サバイバーシッププログラムの構築には、患者個々の力を信じ引き出すサポートを行うという目的を軸に、将来性も</p>

項目	学び（米国の実際）	ディスカッション（考察）
	<p>ーションのツールで、サバイバーのニーズにあった支援を開発、実践、評価し、サバイバーシップの質の向上に努めている。</p>	<p>見越したスタッフの育成（ボランティアやインターンシップ）や、専門の資格を有する者の選定と協働、多職種でのアプローチの調整、実践と評価の見える化などを、戦略的に施設を超えた幅広い視野で検討していくことが必要である。</p>

4. 今後の課題

1) 研修に関する課題

研修に参加する前の準備として、参加者が決定した時点で、参加者と過去の研修生との情報交換ができる場があると良い。その場では、研修の流れや、天候、服装、ホテル周辺の情報などといった現地の情報を共有する。また、米国の医療システムの学習や、語学的な課題への対応（事前に自己の CNS としての役割や問題点など現状をまとめておく、疑問点をピックアップしておくなど）の学習などを行うことで、より積極的に参加でき、学びも深まるのではないかと考える。これまでは、現地コーディネーターの石井素子氏や金森祐子氏に、研修生個々がやり取りをして研修に備えていたが、このように、事前に研修修了者も含め集まることで、より具体的な準備や米国での実地研修のスムーズな開始につながるのではないかと考える。また、研修前から参加者の目標をグループ全体で共有し、グループの目標を明確にすることで、研修中から研修後のディスカッションも目的をもったより効果的なものになると考える。

例えば、2月のがん看護学会における交流集会で、研修の報告と、国際的な看護に興味関心のある人々とのディスカッションを通して、研修の魅力をアピールしたり、海外研修を日本の実践に活かす。次回研修生が決定したら、6月頃の学会（日本 CNS 看護学会）の時期を利用して、研修生と研修修了者が集まり情報共有をする場を設ける。この内容を、現地コーディネーターとも共有できるようにすると、より事前に計画が立てやすいと思われる。

今回の研修では、ワークショップやグループミーティングにおいて、現場で働く CNS の話を聴き、ディスカッションを通して得た学びは深かった。これは、現地コーディネーターの石井氏が、事前に研修生個々のニーズを把握し、研修当日まで調整をしていたことで、米国の医療体制に馴染んだり、実地研修が円滑に開始できるように多くの配慮をいただいているが、さらに現地での体験をより濃密に進めていくための工夫は検討できるのではないかと考えた。研修前の準備の段階から、このような調整ができるよう、ミーティングを持つ機会があると効率的にも良いだろう。

2) 研修の学びを今後につなげるための課題

海外のがん看護における現状やがん医療先進国のがん看護の新しい情報を得たり、APRNの認定者たちの姿勢を身近に感じるための海外の医療や看護に関心を持ち続けられるように、米国がん看護学会(ONS)などへ参加する。また、海外研修の経験者同士の交流や、海外で出会った APN との交流を継続する。今回の研修を通して改めて、日本の文化を意識することが出来た。医療保障制度や文化の異なる米国の看護体制の仕組みそのものを日本に取り入れることは難しいが、日本の文化にあった CNS の開発やサバイバーシップのプログラムの構築など、日本のがん看護の質の向上に活かすための方略を考えていきたい

おわりに

本稿では、今回の研修の学びを「APN の実践と評価・CNS の役割機能、位置づけ」と、「サバイバーの力を引き出す多職種アプローチとプログラム」に焦点をあてて報告したが、この他にも、看護教育や看護管理、ヘルスポリシーなど幅広い学びがあった。また、研修生同士、及び現地コーディネーターの石井素子氏や研修で出会った APN が、研修中のみならず研修終了後も継続して交流を続け、互いに学びを共有することで、グループダイナミックスが生まれ、学びを深め今後の課題を明確にできた。また、石井氏は現地で OCNS として活躍されており、自身が様々な困難を乗り越えながらも米国で目的を持ち、生き活きと頑張られている姿には、深い感銘を受け刺激となった。

今後も、このようなつながりを継続し、ネットワークを広げ、国際的な看護の視点を持ち続けることで、日本のがん看護の質の向上や CNS の役割開発につなげていくことが重要であると考えている。

謝辞

このような大変貴重な研修の機会を与えて下さった日本がん看護学会、小林がん学術振興会に心より感謝申し上げます。また、研修前から研修後に渡り、研修生個々に合わせた細やかで親切丁寧な支援をして頂き、現地での学びが深められるようにと研修のコーディネーターにご尽力頂いた石井素子氏、石井哲氏、金森祐子氏、米国スタッフの方々、全ての皆様に、心より感謝申し上げます。

写真1 ワークショップ2：がん治療内服薬のアドバンス(Tim Freitas. RN)



写真2 ワークショップ5：ヘルスポリシーと看護教育(Sabina Gonzales. RN)



写真 3 UCSF (Mission Bay)見学 Art for Recovery



写真 4 UCSF (Mt Zion) : CNS の役割とがんサバイバーシップ (Deborah Hamolsky, RN, MS,AOCNS)



写真 5 : UCSF(Mission Bay)でのシャドーイング : Symptom Management Service にて



写真 6 UCSF(Pernassus) : 2名の CNS とのグループミーティング

